

---

# 君が奏でる音をさがして

三条司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君が奏でる音をさがして

### 【著者名】

ZZマーク

三条司

### 【あらすじ】

楽器擬人化のお話です。報われない、万年脇役のヴィオラが主人公。オムニバスというか、短編形式をとっていますので、どこからでも読んでいただけます。ちょっとひねくれたクラシック楽器たちの、にくめない日常。

## How do you do? (前書き)

主人公になるにはマイナー過ぎるであろう楽器、ヴィオラ。彼の初登場作品です。

How do you do?

「初めまして」と言つて、右手を差し出すと、大抵の場合、相手に怪訝な顔をされる。

「え…」

戸惑つた表情で眩いで、相手は彼を見つめる。まるで、彼がおかしなことでも言つてしまつたかのようだ。まるで、もう会つたことがあるかのようだ。

それから、相手は、彼の顔をまじまじと見る。ひとつひとつでは、一、二歩下がつて、全身をくまなく凝視されることがある。すると、相手は決まつてこう言つのだ。

「あ、ヴァイオリンさんかと思いました」

彼は、ぎこちなく口を笑顔の形にもつっていく。頬の筋肉を故意に持ち上げて、につこりと微笑んでみせる。そんな事情などお構いなしに、相手は彼のこころにすかずかと踏み入れる。

「でも、よく見たら、ヴァイオリンさんは似てもにつかないですね」

それが、決して褒め言葉の類でないことを、幾たびもの経験の中で、彼はいやといつほど認識し続けてきた。そして、それが相手の真意であることも。

「出来の悪いやつですか？」

そうおどけてみせると、相手は朗らかに笑ってくれる。彼が、とても面白いことを言ったのだと、彼がとても面白いひとだと、そう伝えるために。ただ、相手は永遠に理解することはないのだ。彼が、その笑顔によつて、どれだけ傷ついているかといふことを。

「で、あんた、誰？」

失礼な輩にいたつては、そんな言葉を初対面でつきつけられる。

これにも、精一杯の笑顔で彼は応じる。怒ることが出来ないわけではない。失礼だと思つていらないわけでもない。マナーの悪いのが、見過ごされるべきだと信じているわけでもない。ただ、何故だか、初対面の相手に対して、激昂することが出来ないだけなのだ。

それを、コントラバスなんかは、

「お前の、長所だな。大事にした方が良い」

なんて言つてくれる。

同時に、ヴァイオリンあたりは、

「何故、そんな無礼な振る舞いを許すんだ？だからお前は、いつまでたつてもなめられてばかりなんだ」  
などと叱りつける。

大事にするべきなのかも分からず、なめられてばかりなのも嫌なのに、彼はいつも同じことを繰り返してしまつ。

メガネの縁に、無意識に手をやつてから、一瞬だけ目を伏せる。  
それから、顔を上げたときには、目一杯の笑顔を見せる。

「あ、知らないでも当然ですよ。あんまり、有名じゃないですか  
ら」

自己紹介をしても、その名を知られて「いる」とは少なく、名前を覚えてもらえないことだって多々ある。

「あ、大きいヴァイオリンさんだ」

などと言われると、つい、条件反射で、

「どうもー。大きいヴァイオリンでーす」

なんて返してしまった自分を、彼は恨めしく思う。そういうて、自虐的な言の葉を連ねる彼を、ヴァイオリンが横目で睨むのも、精神的に辛いものだ。

「まあまあ。そういうと、自分のことを笑っちゃえるところが、ヴィーちゃんの良いところなんだから。年がら年中ぴりぴりしているヴァイオリンに、ちょっと睨まれたからって、そういう気に病むことはないと思うよ?」

ところは、ヴァイオリンのいな」ところでフォローをしてくれる、チヨロの言葉だ。

でもやー。

「うん、と芝生の上に仰向ける。両腕を頭の上にやつて組んでから、両目を閉じた。日の光が、目を閉じていても感じられる。

風のそよぐ音を聞きながら、彼は深呼吸を繰り返した。

たしかに、名前を覚えてもらいたかったら、自分のことをネタにするようなことはやめた方が良いのかもしれないけど。なめられたくなかったら、もうちょっと他人に厳しくするべきなのかもしれないけど。ヴァイオリンと一緒にすんじゃねー、とかって、たまには叫ぶべきなのかもしれないけど。

時折吹いてくる風が、彼の赤茶けた髪を揺らす。ゆっくりと田を開ければ、錆びた鉄のようなグレーの瞳に、パステルブルーの空が映り込む。片手でメガネを取つて、同じ手で折りたたんでから、もう片方で鼻の付け根をさすつた。

「でもなー……。

きっと、自分の生き方は不器用なんだと思う。でも、何故だか、それにはがっかりしきれないのだ。

「でもなー……」

今度は、声に出してみた。だからといって、何かが劇的に変わるわけではない。答える出ないことに時間を割いている自分を笑つてしまいたくなつて、彼はもう一度、目を閉じてから、ふつと息を漏らした。

「おい。何をひとりで笑つている。ついに、頭がおかしくなったのか」

頭上から聞こえてきた高圧的な声に、彼は驚いて上半身を起こすと同時に丸っこい目を見開いた。

「ヴァイオリン……。どうしたんだ？」

「」

短い単語と共に、何かが彼の頭の上に落ちる。それが、ヴァイオリンが昨日の演奏会で着ていたシャツだと気付くのに、そう時間はからなかった。

「これが、どうかしたのか？」

「カフスが壊れた。直しておけ」

彼の返事すら待たずに、ヴァイオリンはきびすを返して、歩き始める。呆気に取られつつも、苦笑混じりに、遠くなつていく背中に声をかける。

「分かった！」

しゃんと伸びた背筋が、少しだけ強張ったかと思うと、ヴァイオリンがぎこちなく振り返る。眉間に皺を寄せると、ひとつ、ため息をついた。

「ヴィオラ」

「何？」

呼ばれて、彼 - ヴィオラ - が答える。自然とその口元がほこりんでいるのに、彼は気付いていただろうか。

「午後のリハーサル、遅れるな」

「遅れないよ」

「お前がいないと、曲がまとまらん」

早い用に着いて、用意もしておけ、とヴァイオリンが言いのちで、  
今度こそ去つていいく。

「はいはーい」

聞こえてこないだらうと思いつつも、律儀にヴィオラは返事をした。さきほどよりも、ずっと明るい聲音で。空を見上げると、雲のたなびく様が瞳いっぱいに映る。大きく息を吸つて、肺に酸素をしつかりと取り入れ、

「よしあや」

軽い動きで立ち上がり、うんと伸びをした。

「おれはおれ、だな」

誰にともなく呟いて、満足そうに微笑む。

壊れたカフスがぶら下がったシャツを左手に、ヴィオラが左手を踏みしめて歩き出す。

あつと今日も、忙しくなるだらう。

「ハーネーと叫ぶ笑顔（前書き）

ヴァイオリンとヴァイオラのお話。

## 「コーヒーと君と笑顔

「コーヒーは豆から。きちんと手動のミルで豆を挽く。一度、電動のものを使つたら、味が違うと言われた。以来、電動のものよりもずっと手間がかかるけれど、手動のミルを使つてはいる。慣れれば、深い色をしたコーヒー豆をがりがりと挽く音を聞いているのが心地良くなる。もしかしたら、単に順応能力が高いだけかもしれない、とはヴィオラは夢にも思わない。

挽き終わった豆を、直火式のエスプレッソメーカーに入れる。水を下に引くのを忘れずに。火にかけてからしばらくすると、しゅーしゅーと独特の音を立て始める。待つのが苦痛だと言わんばかりのそれは、まるで、「彼」を思い出させるから、ヴィオラは思わずくすりと微笑んでしまう。エスプレッソが出来上がる間に、耐熱鍋にミルクを注ぎ入れる。弱火でゆっくりと、熱すぎないように、でも芯からあたたまるように。木べらで定期的にかき混ぜて、膜が張るのも防ぐ。

彼のお気に入りのカップは、一点の曇りもない白。陶器独特の、凜としていて、それでいてぬくもりも感じさせる質感は、彼らい好みだと思う。そこに、あたたまつたミルクを入れてから、出来上がったエスプレッソをカップに。泡を立てたミルクは好みじゃないから、このまま。

「よし」

にんまりと、自分に満足気な笑みを浮かべてから、トレイにカップとソーサーをおく。部屋を出ようとしてから、はたと気付いて、トレイを慎重に持つたまま、戸棚からチョコレートの缶を取り出す。

ちゃんと、彼の名前がレベルに貼り付けられたそれには、純度の高いダークチョコレートしか入っていない。

小さな、3?四方の、スリーブにくるまれたチョコレートをソーサーの上にそっと置いてから、ヴィオラは今度こそと部屋の扉を開けた。

控え目なノック。練習中に、大きなノックでないと聞こえないだろうと思つて扉を叩いたら、後でこつぴどく叱られた。騒音を誰よりも気にする彼らしいといえばそれまでだが、それでも、自分の音を聞いているときに、ノックの音など聞こえるものなのだろうか。しかし、彼にはそういつた、とんでも能力みたいなものがあるみたいなので、案外、練習中でも色々な音が聞こえているのかもしれない。

今日に限つて、部屋からは彼の奏でる音が聞こえてこない。

もう一度、ノックをしてみた。大きな音は立てないよう、指の関節で、軽くこづくようにして扉を叩いてみるけれど、いつもならすじい勢いで開かれる扉が、いつまでたっても開かない。

「留守……？　いやいや、そんな、まさか」

もうじりじりしているうちに、コーヒーが冷めてしまつ。もし仮に彼が留守だとしたら、このコーヒーは自分が飲めば良いだけだけど、これをまだ彼に届けるのだとしたら、冷めたものなんて差し出したら、それこそハつ裂きにされてしまつ。あの、鋭い眼光で。

彼の、怒ったときに見せる、凍てつくような視線を思い出して、ぞつとしてしまったヴィオラは、慌ててドアノブに手をかけた。それは、かちやっと澄んだ音を立てて、すんなりと開く。

「あ、開いてる？　ここは、いるんだよな……？　えっと、じやあ、お、お邪魔します」

小声でそんなことを口にしてから、ヴィオラが部屋に入る。後ろ手に扉を閉めたところで、

「お？」

高い天井にお似合いの、細長い窓。少しだけ開いたそれからは、風がそよそよとレースのカーテンを揺らしている。そのまま近くに置かれた、カウチ。深い金色のフレームがついた猫足のそれは、上質なスウェード地に覆われていて、そこには今、彼の体躯が一枚の絵画のよう横たわっていた。

「ああ……」

彼との付き合いは、長い。一緒に弾く機会だって、とても多い。四六時中一緒にいることだって、日常茶飯事だ。それでも、彼が休んでいる姿など、ヴィオラでさえ滅多に見たことがない。きっと、彼と付き合いのないトランペッタあたりは、彼が休むことすら知らないのではないだろうか。それくらい、彼はワーカホリックだから。こんなことを言つと、彼は眉間に皺を寄せるだろうけれど、彼ほど、音楽のことを考えている者を、ヴィオラは他に知らない。

久しぶりに、そして滅多にお目にかかれず、彼の姿を、ヴィオ

「はまじまじと眺める。

鳥の濡れ羽のように艶々と輝く髪が、額に一筋かかっている。閉じられた瞳は、回じく漆黒の睫毛に縁取られていて、流麗なラインを描く眉も、今はじつとそこに鎮座するのみだ。きつちりとアイロンのかけられた白いシャツの襟元からは、白く長い首が覗く。練習しやすいようにか、サテン地のウエストコートは、いつもよりも緩く胸に巻き付いているように見える。細い腰から続く長い脚は、ダークグレイのパンツに包まれていて、軽く立てられた片膝が、布越しでも分かる、彼の体躯の華奢さを伺わせる。

「いんなほつそいのこ、何あんな音が出るかな」

思わず出た言葉には、憧憬が混じる。

「わちんと練習してくるからだ。お前と違つてな」

両田は閉じられたまま、彼がその薄い唇を開いた。

「つおつー、お、起きてたのか、ヴァイオリン…」  
「やもやも、休んでなどいない」

胡乱な田つきで、ヴィオラを睨んでから、ヴァイオリンがカウチから上半身を起こした。片腕をカウチの背もたれにかけて、片膝を立ててこちらを向く彼は、まるで眠りから目覚めた天使のようではある。その田つきが、いやに鋭いことを除けば。

「え、でも、練習してなかつたじゃんか」

「ちつ。これだから、馬鹿は。練習とは、音を奏でるだけでない。樂曲のリサーチ、和音分析、頭だけで出来る練習だつて

たくさんあるんだ」

「そ、そつか」

そうやって、昼夜を問わず、楽曲のことを考へているヴァイオリンが可愛らしいだなんて言つたら、殴られるだらうか。無視されるだらうか。それとも、毒舌よりも更に毒にまみれた罵詈雑言を浴びせられるのだらうか。

「あ、これ

「うん?」

片眉を上げて、ヴィオラが差し出したカップを見やると、ヴァイオリンは少しだけ目元を緩めた。

「ああ

「ちよつと冷めたちやつたかもしけないけど

言つて、ヴァイオリンに手渡す。ふ、とヴァイオリンが微笑んだ。

「これくらいなら、大丈夫だ。そもそも、お前の作るコーヒーは、大概、熱すぎるからな。これくらいで丁度良いのかもしけん

「あ、そうだったの? 今度から気をつけるよ」

いつもよりもリラックスした雰囲気のヴァイオリンにつられて、ヴィオラも笑顔になる。ふたりして、何とはなしに窓辺でそよぐカーテンを見つめた。

「何、練習してたんだ?」

「バッハのパルティータ、ベートーヴンのソナタ、ブラームス

のソナタ、ラヴェルのツィガーヌ、それから、パガニーのカプリ

ース

「パガニー、何番?」

「は?」

「え、いや、だから、パガニーのカプリースって24番あるじゃんか。何番やってるんだ?」

「全部に決まっている」

「えええ!」

難曲中の難曲としても名高いカプリースを、同時に全て習うだなんて、道理で練習し続けなければいけないわけだ。そもそも、そんな高度の目標を自分に課すといふが、ヴァイオリンのヴァイオリンたるところかもしれない。

純粋に、驚きと、それから尊敬の念を込めて上げた声だったのに、ヴァイオリンは無下に顔をしかめると、

「大きな声を出すな、騒々しい。そんなに下卑た声で騒ぎたいのなら、僕の部屋を出てからにしてくれ」

「あ、じめん。つーか、すげえな、ヴァイオリン。ベートーヴェンは、全部つてわけじゃないだろ?」

「ゆくゆくは、全部やる」

「そつか。ヴァイオリンは、頑張り屋さんだよなあ」

なんとなしに言つた言葉に、ヴァイオリンは「ヒーヒーを口に含んでから、ややもつたいぶつた動作でカップをソーサーにおく。

いつも気になつてゐるのだが、ヴァイオリンはカップをソーサーにおくとき、かちやんと陶器と陶器が触れあう音を立てない。ヴァイオラは、何度もつても音を立ててしまつとこうのに。何か、こ

つがあるのでどうか。 それとも、それすらも、練習あるのみなのだろうか。

ヴァイオリンが、黒曜石に良く似た、きらきらとしていて、とんでもなく深い瞳をこちらに向ける。 そして、不敵に笑つて見せた。

「僕を誰だと思っている」

いつも、傲慢にも思える自信に溢れたヴァイオリンを見ると、ヴァイオラは何だか元気が出る。 ヴァイオリンは、頑張つているわけじゃないなんて言つかもしれないけれど、常に音楽に向き合つている彼を見ていると、ヴィオラは嬉しくなつてしまふのだ。 傲岸不遜に微笑んで、いつも背筋をぴんと伸ばしていて欲しい。 そのためなら、手動のミルだつて挽く。 何だつて、出来る。 そんな気持ちになる。

「うん」

歯を見せて笑えば、ヴァイオリンがまたしても顔を顰める。

「何だ、にやにやして。 気持ち悪いやつだな。 さ、僕はこれから練習だ。 出でつてくれ」

「うん。 頑張つてな！」

「何度も言わせる。 練習は、頑張るものではない」

「うん！」

「お前……」

出来の悪い生徒を眺める教師のそれで、ヴァイオリンがカウチから立ち上がった。 ヴィオラよりも少しだけ背が高いのに、ヴィオラよりも細いその身体は、しなやかに動く。 無駄のない動きで、

ソーサーをヴィオラに差し出すと、ヴァイオリンはくるりと背を向けて、譜面台の方へと足を進めた。

「じゃあ、おれ、行くね」「ヴィオラ」

扉を開けて、半身を通したところで、呼び止められる。振り返れば、ヴァイオリンが首だけをヴィオラに向けていた。

「なに?」

「…………おこたるべ、」

今度こそ、満面の笑みになつて言うヴィオラを、氣恥ずかしそうにヴァイオリンが見つめる。心なしか、耳が赤くなつてゐると思うのは、ヴィオラの氣のせいだろうか。

「な、何をじろじろ見ていい。 も、もつもと出て行け。 練習

「うん！」

しつしつと振り払つその仕草も気にならないくらい、ヴァイオラは幸せな気分で部屋を後にする。すぐに、閉じられた扉の向こうから、ヴァイオリンが奏でる音が聞こえてくる。

「がんばれ、ヴァイオリン」

小声で、扉の向こうに咳くと、ヴィオラはソーサーとカップを落とさないよつて、軽い足取りで自分の部屋に向かつた。

## 甘い微笑みには気をつけて（前書き）

ヴィオラとチエロのお話。チエロがさわやか腹黒さんになってしま  
いました。

## 甘い微笑みには気をつけて

その日は、少しづくわくしていた。長い間、ソロ曲にかかりつきになっていたヴァイオリンが、漸くヴィオラに招集をかけたからだ。ヴィオラだけじゃない。チョロも呼ばれた。

（弦楽三重奏なんて、久しぶりだなー）

（ちらかなく差しも相まって、ヴィオラの口元がつい緩んでしまった。）

（つと…いけない、急がないとなんだつた…）

公私共に厳しいヴァイオリンであるが、リハーサルに遅刻するのもされるのも大変に嫌う。どちらかというと、遅刻される方がもつと嫌かもしない。ただでさえ鋭い眼光が、レーザーのようにこちらを見つめるのだけは、避けたい。なんとしても。

「あ…れ？」

小走りに、道を駆けていると、ふと田の端に見知った姿が映った。歩みを止めて、数歩下がる。建物の間の細い裏道に、ふたり、ヴィオラのよく知る顔が並んでいた。

「チョロ？ それに、ピアノ？ 何やつてんだよ、ふたりして」

狭いその道に入つて行こうとすると、ピアノが顔を上げた。心なしかいつもよりも青ざめた顔をした友人は、ヴィオラの姿を認めやいなや怯えた瞳をして、彼とは反対の方向へと裏道を走り去る。

「タイミング悪いよ、ヴィーチャン」

表通りに比べて薄暗い路地の中、艶やかなチエロの瞳だけが光を放つ。走り去りながら、色々なものにつまづいているピアノの後ろ姿を、笑顔で見送ると、チエロが声をかけた。

「気を付けなよ、ピアノ」

「へ、ひる、ひる、ひる…ここつー。」

全く威厳の感じられない罵声が、消えゆくピアノの姿と共に霧散する。何だか居心地が悪くて、ヴィオラは空笑いを上げた。

「い、いやー、『めん。』何か、お邪魔だった？ おれ

「ん？ んー、まあ、大丈夫。これくらいは、予測の範疇内だから」

ヴィオラにはまったく意味の分からないうとを言つて、チエロがにっこりと微笑んだ。

「な、なら良いんだけど」

つられて、ヴィオラもくらりと笑う。家族とはいえ、チエロはたまに何を考えているか分からなくて、ヴィオラは焦るときがある。

「いま、何時？」

日常会話には不向きなほゞ甘い声でチエロが尋ねるので、ヴィオラは慌てて腕時計に目をやつた。

「 やがてこー 」 そのまばたき、おれたち遅刻だよ。 “じつあらへ”

「 そつか。 そつか、 やがてこねえ。 ヴァイオリン、 怒るだらつ

なあ

「 そだよー。 怒るなんでもんじやなこよ。 おれたち、 命が危

なこよー。」

両手をぶるぶると振つて、事の重大さをアピールするハイオーラを、  
チヒロは皿を細めて楽しやうに眺めてくる。

「 チヒロー 」

「 ああ、 いめいめいめん。 ヴィーちゃんせ、 こつもながり可憐こ  
ねえ 」

「 いや、 ねれ、 可憐くなこじ 」

「 そつか。 そんな、 己の可憐さに無頓着なヴィーちゃんも、 また  
また可憐こね 」

「 チヒローー！ 話聞こてるー、 とにかく、 いにからタチシユー  
かないつて。 それでも、 間に合つか分からなに感じじやん?? 」

一度、 ハーヒーを入れ間違えた時のア イオコンの瞳を思に出しつて、 思わず筋がぞつとする。 ふるふる、 と恐怖心を取り除くよう頭を左右に振つて、 ヴィオラは未だ余裕しゃくじやくの笑みを浮かべてこむチヒロを見上げた。

「 じつあえず、 走るつー。」

セビアを返して、 これ走るつとかねと、 チヒロが、

「 あ 」

「 なーんーだーよー。」

「俺、楽譜部屋に置いてきたまんまだ。取りに帰らなきや」

「なつ！ そ、そんなことしたら、確實に遅れるじゃん！」

「うん。だから、俺は楽譜取りに戻るけど、ヴィーカちゃんは先に行つてて？」

「そ、そんなこと……」

「だつて、ここにヴィーカちゃんが通りかかったのだつて、ただの偶然でしょ？ 別に、一緒にリハーサル行こうって言つてたわけじゃないし。これはそもそも、俺の責任なわけだし」

「そ、それはそうかもしれないけど」

でも、それつて何か、おれがチヨロを見捨てるみたいじゃないか。

困つたように眉根を寄せれば、チヨロが菩薩のよつに柔らかい微笑みを浮かべてくる。その何もかもを許してしまつ微笑みが、逆に、ヴィオラの罪悪感に拍車をかける。

「いー、いやいや！ だめだだめだ！ いじでおれが行つたら、チヨロに悪い！ われ、待つ！ だから、一緒に行こう。な？」

「ヴィーカちゃんは、本当によこだねえ」

言しながら、チヨロがぽんぽんとヴィオラの頭を優しく撫で、それからふにゃふにゃと髪を撫でた。

「でも……」

頭に手の平を載せたまま、チヨロの声が少し曇る。メガネの位置を直して、ヴィオラが上目遣いにチヨロを心配そうに見つめると、チヨロは、これまた不必要に甘いため息をついた。

「ヴィーカちゃんの申し出はとっても嬉しいんだけど、ふたりとも

リハーサルに遅刻しちゃつたら、ヴァイオリンの怒りが噴火して、  
リハーサルどころじゃなくなつちやうね

「は！」

大いにありえむチヨロの指摘に、ヴィオラの顔が青ざめた。

「だから、やつぱりヴィーちゃんが先に行つた方が……」

「わーかつた！　じゃあ、こうしよう！　おれが、チヨロの楽譜を取りに戻るよ。　チヨロは先にヴァイオリンのところに行つてて？　ヴァイオリンのことだから、もうすでに苛々してると思つんだけど、チヨロの方がヴァイオリンを宥めるの上手いじやんか。　だから、チヨロ、ヴァイオリンにちゃんと説明しておいてくれよな！　じや！…」

チヨロの返事も待たずに、ヴィオラは全力疾走を始める。

「ヴィーちゃん！　鍵！　忘れてるよ！…」

後ろから、チヨロの良くなれる声がして、ヴィオラは急ブレーキをかけた。　鍵をして、ふらふらと上方で揺らしているチヨロのところまで戻ると、チヨロが人好きのする笑顔で言った。

「ヴァイオリンのことは、任せおつて？　ありがとう、ヴィーちゃん」

「どういたしまして！」

ひとに感謝されることをするのは、気分が良いなあ。　そんな脳天気なことを思いながら、ヴィオラはチヨロのアパート田がけて走り続けた。

「遅い！」

「ひい！」

あまりの剣幕に、思わず悲鳴が出てしまう。ヴィオラは、はあと息を切らしながら、ヴァイオリンの殺人的な視線ビームにさらされ、席にもつけずにただひたすら怯えながら立ち尽くした。チョロから説明聞いてないの？などと言えるような雰囲気では、決してない。

「遅い！ 一体何度言えば分かる？ 遅刻するな。 そんなに難しいことなのか、それは」

鬼教師のそれで、細い腰に両手をやり、ヴァイオリンがヴィオラを睨む。田が合つたら、氣絶してしまうかもしれない。そんな不条理なことを思わせる両の瞳から、ヴィオラは必死に田を背けた。

「ん、じめん」

それだけをやつと絞り出すと、盛大なため息をつかれる。

「お前、やる気あるのか？」

「あ、あるよー。全然あるつて！ ていうか、今日のリハーサル、めちゃめちゃ楽しみにしてたんだから、おれー！」

「ふん」

反射的に声を上げたヴィオラを、面白くなさそうに、でも興味深

そうに見てから、ヴァイオリンが軽く鼻をならす。

「時間の無駄だ。わざわざ始めんな」

言われて、ヴィオラは定位位置に座る。左隣に座っていたチエロをちらりと見れば、いつもの優しい笑みを浮かべたチエロだった。

「ちえ、チエロ？」

「んー？」

「あの。 も。 ヴァイオリンに、ちゃんと……」

「ああ。 「めんね、ヴィーちゃん。 僕がついたときには、ヴァイオリンすでにお怒りモードだったからさ。 いつタイミングなくしちゃって」

「そ、そなんだ……」

「「めんね？ 怒つてる？」

「いや、怒つてないけど……」

「そう。 ヴィーちゃんは、よいこだね。 ありがど」

何か。 何かが、おかしい。 そう思うのだけれど、何がどうおかしいのか言えない。 舞台に窮するヴィオラをよそに、チエロはさつさと楽譜を受け取ると、ヴァイオリンとヴィオラに向けて甘い笑みを向ける。

「わ、始めようか」

何か。 何か、おかしい。

おれ、何か、騒された気がする……。 一

ヴィオラの内なる声は、リハーサルとこの部屋で沈黙せざるをえないのだった。

君をさがして右往左往（前書き）

コントラバスお披露目話。  
のはずが、チヒロや、チコーバ、や、ら、も参戦。

## 君をさがして右往左往

シュー・ベルトの鱈をやる。

そう、ヴァイオリンが宣言したのは、つい数時間前のことだ。時としてもすく直感的に行動するヴァイオリンに呼びつけられたと思ったら、開口一番それを言い渡された。

「鱈？」

「鱈だ」

大まじめに言つヴァイオリンの顔を見つめながら、すでにヴィオラの頭の中には鱈のメロディーが流れてくる。

「鱈かあ……」

夢見心地に呟けば、顔面をペシリと譜面で叩かれた。ヴァイオリンが、呆れた顔をして嘆息する。怒つてゐるわけではないのは、ヴィオラが音楽のことを考えていたからだろう。地面に落ちてしまつ前に拾つた譜面を手に、ヴィオラがヴァイオリンを見上げると、彼は、

「みんなのパートだ」

「おれに、配つて来いと？」

その傲岸不遜な命令に、少しだけ、ほんの少しだけ勘に障るものがある。が、ヴァイオリンがきょとんとこちらを見つめ返すのに、すぐにその思いは消え去つてしまつ。

そうだった。相手は、ヴァイオリンなんだつた。

王子に、庶民

の何とやらを説いても意味がないように、ヴァイオリンに人使いが荒いなどと嘆いても、のれんに腕押しだ。下手をすると、そののれんに反撃されかねない。

「分かつたよ」

諦めと、やる気を半々に含ませて、ヴィオラが立ち上がる。ヴァイオリンは、うつすらと笑みをたたえたまま、ヴィオラに一歩近付いた。その華奢な指をヴィオラの肩に置くと、

「良い曲になるぞ」

「だな」

ヴィオラも笑顔で応え、珍しく上機嫌のヴァイオリンの元を去つた。

もともと、引きこもり体质で、滅多に部屋から出てこないピアノをつかまるのに、そうそう苦労はいらなかつた。ノックしたドアを開けてくれたピアノの顔が、異常にやつれてみえたのが怖くて、思わずヴィオラは顔色の悪い友人に夜食を作つてしまつ。腹持ちが良いように、身体に優しいものを、とミルク粥を作つてやれば、ピアノの大きな目がうるうるし始める。

「お、おい。ピアノ。泣いてるのか？」

「泣いてない！湯気が目に沁みるんだ！」

「そ、そなのか……？」

ピアノの部屋にはいつも大量の楽譜が積み上げられている。嫌と言えないこの友人は、次から次へと、アンサンブルや伴奏の依頼を受け付けてしまい、結果として己の首を絞め続けている。年がら年中ストレスを溜めっぱなしなの」「どうやら、弾くのをやめる気にはならないらしい。

「」の百科事典ほどの厚みのある楽譜の山に、更に曲を追加するのかと思うと心が痛んだが、このまま「」す「」帰つても、ヴァイオリンに何と言えば良いのか分からぬ。板挟みに苦しんだが、結局、ヴィオラは鱈の楽譜をピアノに差し出した。

「」れは？」

「鱈。ヴァイオリンが、やりたいんだつてや」

「へえ！ 良い曲だよね！」

ぱつと顔が明るくなると、ピアノはまだ食べかけの粥を片手に、もう片方に楽譜を受け取り、いそいそとそのページを開けた。

「ああ、良い曲だねえ。名曲だよねえ」

「やつてくれんのか？」

「何言つてゐるのさ。」こんな名曲の前にして、断れるわけないでしょう」「

「ありがとな、ピアノ！」

そんな風に色々引き受けちゃつから、後々大変なことになるのでは？などという思いがちらついたが、あまりにも純粹に笑うピアノを見て、ヴィオラはなるだけ柔軟な笑顔を返す。

そんなやりとりがあつたのが、かれこれ3時間ほど前になる。

「どこ行ったんだよー」

チヨロとコントラバスが見当たらないのだ。一応、ふたりの部屋を訪ねてみて、30分ほど待つてみたのだが、収穫なしだった。携帯にもかけてみたが、どうこうわけか、ふたりとも圏外にいるみたいである。

「うひ、暗くなってきたし……。おなかすいてきたし……。  
でも、楽譜渡さないと、またヴァイオリンに叱られるし……。チ  
ヨー。コントラバスー。どこに行ひちゃったんだよう……」

ついつい半泣きになってしまつ、ヴィオラ、近くへ影があった。

「ヴィオラ？ 坊じゃないか。何してるんだ、こんな夜遅くに

良いこは、おうちへ帰つていなきゃダメじゃないか、とでも言つたげなその野太い声は、しかし、ヴィオラの聞き知る声だ。

「チューバ……」

やつと、見知った顔に出会えた安堵感で、つい涙ぐみそうになる。チューバは、そのがつしりとした手をヴィオラの頭の上に置いて、がしがしと撫でてくれた。

「どうした？」

「チヨロとコントラバス探してるんだけどさ……」

「ああ。あいつらなら、いつものところにいるんじゃないかな？」

「いつものところ？」

あまりにもあつたリトチュー・バが言つものだから、涙も引っ込んでしまつ。ヴィオラは期待に溢れた瞳をチュー・バに向けた。

「つて、ビー？」

「ほら、その角を曲がつたところに、バーがあるだろ？　地下に降りていく階段があるところ。そこにふたりしてたむろつてるんじゃないのか？　あそこは、コントラバスの行き付けのバーだから

「ば、バー……」

何て大人な響き。じくり、と生睡を飲み込めば、チュー・バが人好きのする豪快な笑い声を上げる。

「大丈夫だよ。コントラバスとチョロがいるところだ。取つて喰われたりしねえつて。な？」

「お、おう……！」

精一杯強がつて返事をすると、チュー・バは満足そうに二、三度、ヴィオラの肩を叩いた。それから、にかつと頬りがいのありそうな笑みを向けて、

「じゃあな、坊。グッド・ラック！」

迷いのない歩みで、ずんずんと遠ざかるチュー・バの背中をじばし見つめて、ヴィオラは自分に渴を入れる。

「つしゃー」

いや、参らん！ バー！ 大人の階段！

意味不明なことを心の中で呟えながら、ヴィオラはチュー・バの教えてくれたバーへと足を踏み入れた。

薄暗い照明の中、ちらほらと人影が見える。思っていたよりも煙草臭くなくて、もしかしてここは禁煙バーなのだろうが、などと馬鹿なことに思いを馳せる。カウンター席に並んで座つた人影に、ヴィオラは安堵のため息を盛大に吐いた。

「おや？ ヴィーちゃん」

チュー・ロガこちらに気付いてくれて、気さくな笑顔でヴィオラを招いてくれる。ぎこちないながらも、カウンター席に座ると、ヴィオラは早速楽譜を取り出そうとした。が、

「ヴィーちゃんは？ 何飲むの？」

「え？ お、おれは、アルコールは……」

「何言つてるの、！」、「バーだよ？ 来たら飲まないといけない、バーだよ？」

「ええ！ そ、そうなのか？ 飲まないといけないのか？」

「そうそう。飲まないとね、法律違反なんだ」

「ほ、法律違反！ いや、でも、おれ、あんまり飲まないから」

「じゃあ、俺が選んであげよつか。 そうだなー。 あんまりお酒に慣れてないんだつたら、テキーラのショットなんてどう？」

「て、てきーらのショット？ そ、それ、初心者向け？」

「初心者も初心者、大体のひとはテキーラから始めるよつてへりい、初心者にお馴染みの飲み物だよ」

「そ、そうなのか……」

微塵もチエロを疑おうとしないヴィオラを、チエロは至福の表情で眺めている。初心者にはハードルが高すぎるだろう飲み物を、ヴィオラが頼もうとしたときだった。

「パナシェをひとつ。」この坊やに

ぐぐもつた空気を、地震のように震わせる声がして、ヴィオラの飲み物がオーダーされる。チエロは途端に唇を尖らせて、隣に座った寡黙な兄妹を睨み付ける。

「コントラバス！ どうして邪魔するの」

「邪魔じやない。ヴィオラを誑かす、お前が悪い」

「え？」

「」との成り行きがいまいち掴めなくて、ヴィオラが首を傾げると、チエロは「あーあ」と大きく伸びをして、残念そうにヴィオラに視線を送つた。

「ヴィーちゃん。テキーラは、初心者向けの飲み物じやないよ」

「え？ え？」

「パナシェなら、大丈夫だ」

からん、とコントラバスの手にしたグラスの中で、氷がぶつかり合つ音がする。深い琥珀色をした飲み物を口にして、コントラバスはやつとヴィオラに目だけを向けると、微笑した。

「あ、ありがとう……」

コントラバスは、いつも優しい。あれやこれやと世話を焼いて

くれるわけじゃないけれど、こつもこじれとこうときには、傍にいてくれる。兄のような、父のようなコントラバスの前では、ヴィオラはいつも自分がとてもなく子供のように思える。コントラバスの親切はいつも的を得ていて、それが嬉しいのだけれど、同時に何故かとても恥ずかしい。

「なに、なに。何でヴィーちゃんたら、頬染めてるの？ 何でそんな可愛い声ありがとうとか言つちやつてるの？」

チエロのやつかみが終わるのを待つて、コントラバスが口を開く。

「どうした？ 僕たちに、何か用か？」

「あ、ああ、そうだった！ これ……」

言つてから、カバンの中をじんじんとしていると、カウンターの反対側から飲み物がヴィオラの前に置かれた。

「とりあえず、飲んでみる」

ゆつくつと瞬きをして、伏せ田がちに言つコントラバスの言葉通り、ヴィオラは素直にグラスを手にする。こくじと飲み込んだその飲み物は、アンバー色をしていて、少しだけ弾ける炭酸と柑橘系の後味が、歩き回った身体に程よく染み渡る。

「つまいだる」

喉の奥で笑いながら、コントラバスが片眉を上げる。

「うん」

「だからつて、一気に飲むんじゃないぞ。アルコールはアルコ

ールなんだからな

「うん」

諭されるよ<sup>うこ</sup>して、ヴィオラはゆっくりと一口を飲み込んでから、カウンターにグラスを置いた。カバンの中から、チ<sub>ヒ</sub>ロとコントラバスのパートを取りだしてから、ふたりに差し出す。

「ん？ 新しい曲？」

チ<sub>ヒ</sub>ロが手にして楽譜を、目を細めて見る。この薄暗い中では、実はあんまり良くないチ<sub>ヒ</sub>ロの視力は役に立たないのかも知れない。

「鱈、か」

「ヴァイオリンが。 やめ<sup>ハハ</sup>て」

「良いね。 良い曲」

チ<sub>ヒ</sub>ロが微笑めば、コントラバスも、

「面白い」

乗り気みたいだ。

「うん」

夜遅く、歩き回った甲斐があるかもしれない。ヴィオラは、漸く満足して、グラスに手を伸ばした。

## 勇ましきれい女に勝つ術はなし（前書き）

外道だー邪道だー腐つてゐーなどと言われるかもしだれませんが、この楽器擬人化では少々BL要素を入れていこうと思つていています。登録した際にもそう書いておいたので、ここに来られた方は、もれなくそういう準備が出来ていらっしゃいますよね？

では。

ちょいと、フラグを立ててみました。

弦楽器もあともうひとりで全員揃います。お好きなカップリングをお楽しみくださいませ。

## 勇ましき乙女に勝つ術はなし

「貴方たち、どれだけの今までとんまで愚鈍なの」

開口一番、そう言われた。ちなみに、まだヴィオラもチョロも、足を一步も部屋に踏み入れていない。ドアノブに手をかけて、ドアを開くと同時に罵声を浴びせられた。

「いつもながら、手厳しいねえ。ふわあ……」

あぐびをしたせいで涙目になりつつ、チョロが言つ。もっとも、その内容に反して、口調と顔からは微塵も気にしている態ではなさそうだが。

「あぐびをしないでー。」

「なーんで?」

柳眉を釣り上げて、ついでに声にも鋭さを付け足して注意をされても、チョロは穏やかな笑みを崩さない。

すげえなあ、チョロは。

他人事のようにヴィオラは感心する。

「何故って。そんなことも分からぬの? 呆れた知能指数の低さね。お兄様も、さぞかしお困りでしょうに。貴方たちのよう、動きものろければ頭ものろい、役立たず過ぎるひとたちの面倒をみさせられて、お兄様がお可哀そつー。」

大袈裟に田の縁を人差し指で拭き取る仕草をすると、これまた大仰に手のひらで顔を覆つてみせる。

「えー。でも、ヴァイオリンって、意外と出来ない子だよね」  
チエロの不用意な一言に、彼女、第一ヴァイオリンは今度こそまなじりをきつと吊り上げた。

「なんですって！」

「ねえ？ ヴィーちゃん？」

「なんで、そこでおれに振るかな、チエロー？」

第一ヴァイオリンの視線が怖くて、ついついチエロに隠れつつそういう言つと、チエロはまたしても悪意の感じられない笑顔で、「だつて、ヴィーちゃん、よくヴァイオリンの世話してるじゃない？」

「……なんですって？」

第一ヴァイオリンの声が下がつた。と同時に、部屋の温度も下がつた気がする。兄である第一ヴァイオリンそつくりの、絶対零度の視線で、ヴィオラはすでにここに来た目的を見失い始めていた。单刀直入に言えば、逃げたい。ものつそ、逃げたい。

「い、いや！ われ、おれなんて、全然。全然だつて！ ヴァイオリンの世話なんて、そんな大層なこと、出来ないよ。おれがやつてるのなんて、すずめの涙みたいなもんだし」

恐ろしすぎて、彼女と田が合わせられない。一体どういう顔で、ヴィオラのことを聞いているのだろう？ 気にならないといえば嘘になるが、それ以上に、本気で恐ろしい。

「分かれば良いんですけど。そもそも、貴方ってひとは」「そのへんでやめておけ、ツヴィ

「お兄様！」

最後の一言は完全にハートマークがついていたと思われる。やきほど低くなつた声も、瞬時に甘い声に変わる。いつからそこにいたのか、というか、今まで何をしていたのか。お気に入りのカウチに彼にしてはリラックスしたいでたちで半身を預けているヴァイオリンは、やれやれと億劫そうに立ち上がつた。す、とそこへ背筋を伸ばして立てば、たちまち、

「はあん！ お兄様、素敵！」

と第一「ヴァイオリンは、倒れそうになる自分の体を、壁に手をついて支えた。

「相変わらず、ヴァイオリンのフロモンはまだ漏れだねえ」「お前に言われたくない。 年中誰かれ構わずべたべたしている節操無しが」

「やきもち？」

「そのおめでたい脳みそ、一度どこかでメンテナンスに出してもらえば良い」

「じゃあそのときは、ヴァイオリンも一緒にね」

にここに相好を崩さないものの、ヴァイオリンの辛辣な言葉に負けない受け答えをするチエロに、ヴァイオリンが目を細める。ヴィオラなら、その視線を受けただけで硬直してしまってそうなものだが、チエロは神経の太さが違うらしい。フレンドリーとしか形容出来ない完璧な笑顔をたたえたまま、白い歯を見せた。

「で？ 今日、おれとヴィーちゃんを呼んだ理由は？」

「しと」

「大丈夫ですわ、お兄様！ お兄様がその麗しいお声を煩わせませんとも、私がこのうすのろ昧者どもに、私がお兄様に代わって説明いたします」

言いかけた言葉を遮られて、しかも熱の籠つた言葉でたたみかけられて、ヴァイオリンは少し気押されたか、ぱちぱちと瞬きをしながら神妙に頷いてみせた。満足そうに微笑んで、第一「ヴァイオリンがくるりとヴィオラとチエロに向き直る。」 気高い頬笑みを浮かべる第一「ヴァイオリンは、そうしていればとても高貴な者に見える」というのに。それを台無しにする見下し笑いで、彼女は一言だけ。

「死と乙女」

「カルテット？」

「それ以外に、なにがあると？」

「だつて、リートもあるし、小説も映画も、それに絵画だつてあるからさ」

「くつ！ 何て生意気なの、チエロー！」

「それは、おれに、それはこつちの台詞だよ、とか安っぽい」と言わせたい釣り？」

「ああもう、チエロもツヴィもやめなよー。」

第一「ヴァイオリンの眼に殺意が籠り始め、チエロの鷹揚な笑みが震えているのをみてとつて、ヴィオラが慌ててふたりの間に割つて入つた。

「ほら、チエロもさ。ヴァイオリンが折角おれたちのこと呼んでくれたんだからさ。死と乙女、名曲じやんか。」こじは素直に喜ぼうよ」

「ふーとこれ見よがしなため息をついて、チユロが一度田を閉じた。ゆつくつとそれを開くと、チユロの田の前でおひおひしてくるヴィオラをぎゅっと抱き締める。

「えええ、ちよつと、チユロー。」

「ヴィーちゃんは良い子だねえ。シヴィに爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいよ。どうしてこいつも違うかなあ。シカイ、ヴィーちゃんとよく曲中では組んでることな」

「共通の目的があるからです。お兄様を引き立てるところ……、お、お兄様？ どうされました？」

「……ん？」

「つものヴィア イオリンらしくな」、心ここにあらずといった風に、ヴィア イオリンが生返事を返す。

「チユロ」

「なあに？」

「離れる」

「誰から？」

「それに決まってる」

それ呼ばわりされたヴィオラは、腕に込める力を強くしたチユロから逃れようともがいている。

「ヴィーちゃんの」とへ。

「離れる」

「どうして？」

「リハーサルを始めるわ」

「やにせと興味津津の顔のチエロにきびすを返すと、ヴァイオリンは冷たい聲音でオーダーを出し始める。

「ヴィオラ。譜面台の用意を。チエロ、椅子を定位置に置け。ツヴィ、楽譜を」

「はい！」

嬉々として第一「ヴァイオリンが動き始める。まだ動こうとしたいチエロと、動きたくても動けないヴィオラに侮蔑の視線を送ると、

「ほらほら。貴方たちが救いようのないお莫迦さんだってことは分かつたから、さっさと用意をしてちょうだい。まさか、お兄様の的確なオーダーが理解出来なかつたわけではないんでしょう?」

「手厳しいねえ」

どこか楽しそうに呟くチエロを見上げて、ヴィオラは情けない声を上げた。

「チエロー。いい加減、解放してよ

カルテットのことで頭がいつぱいになつてしまつっていたヴィオラには、カウチで苛立ちを紛らわせようとしているヴァイオリンの姿は、目に入つていなかつた。

## 花びら浮かぶは潮の瞳（前書き）

弦楽器ラストを飾るのは、ハープです。  
活動報告の方で詳しく書くつもりですが、ハープのイメージ声優さんは、下野紘さん。ふにゃん、と少し抜けた可愛らしいハープ。うちでは、フルートとできている設定になっています。

## 花びら浮かぶは湖の瞳

「お、いたいた」

思わず、口元がゆるむ。満足したねこの口で、ヴィオラが誰にともなく独りごちた。

今日の探し人は、見つけにくいことこの上ない。

決して、凡庸な容姿などではない。むしろその逆で、とても人目につく容姿をしているにも関わらず、何故か集団に紛れやすい。集団からはみ出ることもなく、突出することもなく、しかし、無視されるわけでもない。

気付けばいなくなつていた。それが、今日の探し人である。

そんなわけで、他の誰に聞いても、行方を知らない。そういえば今朝見かけた、そういえば昨日はどこそこにいた、なんて情報が得られるだけで、ちつとも現在の情報が掴めない。いや、厳密に言うと、それら全てを把握しているものが一人、いるにはいるのだが。その彼を捜すのも一苦労だったので、ヴィオラは結局、街をうろうろと歩き回つて今に至る。

当の本人はといえば、花束を片手に、ふわふわと妖精のような足取りで石畳の路地を歩いていた。

「ハープ！」

後ろから声をかける。口元にメガホンのよつに手をつけて、なるたけ響く声で。

なのに。

「あ、あれ？」

他の通行人がヴィオラの声に反応する程度の声量だったはずなのに、呼びかけられた本人は、先程と変わらず、ほわんほわんと歩き続けている。

「は、ハープ！」

もう一度、今度こそは大声で、肩につくかつかないかのブロンドをきらきらと輝かせているハープの後ろ姿にぶつける。

これで振り向いてもえなかつたら、走つて追いかけるしかない。そう心の中で決めておいてから、ヴィオラは浮世離れたハープの背中を見つめた。

ヴィオラの声は、風に乗つて、石畳の路地を飛んでいったらしい。そう広くはない路地の両脇に細長く伸びた建物が、透き通つた空に繋がつている。ふと歩みを止めて、ハープが顔を上げた。さら、とブロンドが肩に触れるのが見て取れる。音の風をしばらく眺めてから、ようやくとハープが肩からヴィオラの方へと向き直つた。

「あ」

お世辞にも通る声とは言えないが、代わりに、天上の歌声もかくやとばかりの声でハープがヴィオラの姿を認めて微笑んだ。

「よー」

その場に立ち尽くしたまま、一いちらへとは向かつて来ないハープのおつとつさには慣れている。ヴィオラは、駆け足で近寄つてから、

顔をほこりばせた。

久方ぶりに見るハープは、相も変わらず、爪の先まできらきらとしている。整えられた調度品のように輝くブロンドはむらむらと彼が首を傾げるたびに揺れ、透き通る湖色の両の眼は見つめる相手の心を映す水面のごとく。きつちりと第一ボタンまでかけられた白いブラウスに、ベルベットのリボンタイが映える。

「ひさしぶり。元氣？」

心地良い声でハープが尋ねる。

「おう、元氣だぞ。ハープは？　元氣か？」  
「ぼく？　うん、そうだね。元氣といえば、元氣かな」

言葉とは裏原に、長い睫毛を伏せて顔を俯かせるハープは、女の子であるシヴィの何倍も儂げに見える。なんて言つたら、色々な方面からたこ殴りにされるかもしれない。そう思つて、ヴィオラは個人的な感想を、個人的な感想のままに留めておくことにする。

「どうした？　元氣とかつて言つてる割には、なんか暗いけど」  
「うん……」

ふう、と甘いため息をつくハープは、物憂げな横顔で視線を上げる。

「フルートにね。最近、会えてなくて」

意外と家族意識の強い弦ファミリーにおいて、この少し変わった遠縁は、木管ファミリーのフルートとひどく親しい。それはもう、

色々な噂が立つくらいに。

「会えて、ない」

「そう。なんだつたつけ。木管アンサンブルだと何だとかがあるんだつて。つまらないよね。その間、ぼくはフルートに会えないんだもの」

まるで恋人との関係を憂う口調を揶揄したかつたのに、ハープはますますアンニコイな顔つきになつた。ひく、ビヴィオラの口元がひきつる。

「ちなみに、最後に会つたのは、いつ？」

何故、そんなことを聞くのだろう。自分自身に聞いてみたい。が、それももつあとの祭り。聞いてしまつたものは、仕方がない。ハープの答えは、うつすらとしていた予感を、はつきりとした現実へと変えてしまつた。

「今朝」

「け、今朝？ つて、今朝？ 今日の朝？」

「うん。朝は、フルートと一緒に過ぐすつて決めてるんだ、ぼく」

天使のような純朴さで言い切られると、後光が差しているように見える。ヴィオラは眩しいものでも見たかのように目を細めて、わざとハープから視線を逸らせると、乾いた笑い声を上げた。

「そ、そつか。ははは……。今朝ね……。毎朝ね……」

何か、とんでもないことを聞いてしまつ氣がする。いやいや、気のせいだ。気のせいに違いない。毎朝、同じひとと一緒に時間を過

「すなんて、そんなの、普通に決まっている。みんなしていることだ。きっと、そうだ。そういうヴィオラは、毎朝、ひとりで起きているけれど。ヴァイオリンを起こしにいくことはあっても、チョロに起こしてホールをもらうことがあつても、毎朝会うなんてことはない。けど。きっと、それは、ヴィオラが変わっているからなのだ。

無理矢理、自分をマイノリティーに仕舞い込んでから、ヴィオラはぶるぶると首を振つて気分を切り替える。

「あ、じゃあさ。今日のコースは、ハープにとつては嬉しいものかもよ」

じゃーん、と擬音語を口にしながら、楽譜を取り出す。

「デビュッシーのソナタ。ハープとおれと、それからフルートのメンバーなんだぜ。フルート、今は忙しいのかな？ だったら、ハープの方からフルートに楽譜渡しておいてもらつても良い？ で、ハープとフルートに都合の良い日があつたら教えてよ。おれ、それに合わせられるからだ」

てきぱきと、楽譜の中からハープとフルートのパートを抜き取り、持参していたファイルにそれらを入れると、ハープに手渡そうと差し出す。

「知ってる？ この曲。他のソナタに隠れて、あんまり知られてないかもしれないんだけどさ。めちゃくちゃ名曲なの」

と、こじまで語つてから、いつまでたつても差し出した楽譜が受け取つてもうえていないことに気付いた。

「ハープ？」

頬りなげな瞳は開かれたまま、華奢な首に支えられた顔はこちらを向いたまま。しかし、その薄い瞳は、ヴィオラのことを見てはない。何故か、それだけは瞬時に理解出来た。

「おーい。ハープ？ ハープー？？ おーいってばー」

数度と言わば何度も呼びかけて、諦めようかと思った矢先。このまま声を上げていれば、自分が変質者のように思われるのではないかと懸念したところだつた。

「あ。え？ なに？ 「ごめん、聞いてなかつた」

「いや、聞いてなかつたのは、めちゃめちゃ分かつてたけどさ」

「え？ なに？ 聞こえなかつたよ」

「いやいや、今のはただの独り言」

そうだ、そうだった。久方ぶりに会つから、久しぶりにこの天使の容貌を見たから、ころつと忘れていたけれど、ハープのマイペースつぶりはヴァイオリンが青筋を立てるくらいだつたのだ。だからこそ、ヴィオラがこうしておつかいに出されているのだ。ツヴィはヴァイオリンのところを離れようとしないし、チエロはハープが話を聞かないとなると容赦なく無視してしまいそうだし、ダブルベースではハープが怯えかねない。

ハープは、無邪気な笑みを浮かべて、ひとり苦笑するヴィオラを眺めている。こほんと空咳をしてから、ヴィオラは頭を搔きつつ、

「「ごめんごめん。これ。今度、一緒にやろうよ。フルートも一緒にさ」

「フルートも？」

ぱあつと周辺が明るくなつたような錯覚を覚える。

フルートの単語に、ハープの顔色が途端に明るくなる。すべすべのほつぺたに紅を差して、相好を崩す彼に、ヴィオラは持つていた楽譜をもう一度差し出した。

上田遣いにヴィオラを見つめて、ハープが手にしていた花束を代わりに差し出した。

「これ、お礼に。あげるね」

ヴィオラが花束を受け取ると、ハープは両腕をクロスさせて胸の前で楽譜を抱いた。目を閉じて、楽譜にキスをするように顔を近づける。そして、花がほころぶよつた笑みを見せる。

「ありがとう、ヴィオラ。今日、ちょっと落ち込んでたの。夕方までフルートに会えないから。でも、ちょっと元気出たよ。これ、フルートのパートはぼくから渡しておくれからね」

じゃ、と片手を挙げると、もう一度両手でしつかりと胸に楽譜を抱いて、ハープがきびすを返す。手を振りながら別れの言葉を口にするヴィオラを後ろに、ハープはまた、ふわふわとどこかおぼつかない足取りで路地の人混みの中に消えていった。

「かわいいなあ、ハープは」

思わずそう口にしてしまつて、ヴィオラはほつと口を押さえた。今をフルートあたりに聞かれたら、阿鼻叫喚の地獄絵図が待つている。きょろきょろと周りを見回して、フルートの姿がないのを見てから、ヴィオラはほつと息をついた。

「わ。おれは帰つて、こいつを花瓶に入れてやらなきゃな

ぐるりとハープが行つた方向とは逆に歩み始めながら、ヴィオラ  
は鼻を動かして花束の放つ香りを吸い込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1533n/>

---

君が奏でる音をさがして

2010年11月18日02時58分発行